

Title	近代日本における工業化の一断面
Sub Title	
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.67 (1978. 3) ,p.178- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000067-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本における工業化の一断面

関 根 政 美

工業化 (industrialization) は、機械制大工場組織の導入とその為の条件整備とを、その出発点とする。そして、工業化の過程は、工業化の導入される当該社会の様々な環境諸要因との相互作用の影響を受け、導入の過程においては、個別的な過程を辿ると考えられている。つまり、工業化は当該社会に大きな衝撃を与えつつも、社会の様々な環境諸要因、この場合、自然風土的なもの、文化歴史的なもの、経済、法律、政治、技術といった社会的要因などが考えられるが、それらによって規制されるわけでもある。とすれば、これら環境諸要因を無視しては工業化はうまく行かぬとも考えられる。いずれにせよ、環境要因を文化歴史的側面に限ってみても、西欧文明を代表する工場組織やその運営方法と、日本の在来の文化との間の対立葛藤あるいは融合と変容の過程が、近代日本の工業化過程の中に見られるともいえよう。

報告者は、日本の工業化が曲がりなりにも成功したのは、在来の環境諸要因に巧みに適応しかつ環境を変化させたということが、ことの良悪は別としても、大きな原因の一つであると考え、それを幕末明治初期の横須賀造船所の工場組織の導入過程を通して具体的に考察したいと思った。ただ今回は、文化的歴史的環境要因との関連のみを、ミクロな形でしか扱えなかった。

横須賀造船所（現在主要な部分が米軍基地となっている）は、幕末明治初期を通じて、御雇外国人（フランス人）を雇い入れ、西欧から工場設備、機械を一括して輸入し、彼らによる建設指導と運営および実習教育を通して、当時の西欧の工業化の水準に匹敵する工場組織と工場運営技術をそっくりそのまま導入しようとしたものである。しかし、明治10年代に一応の技術導入も峠を越し雇外人の用が済むと、彼らとは異なった工場運営（特に労務管理の面で）の方法が明確になり、後に日本的経営とか経営家族主義とかいわれる労務管理の方向へと進む基礎が整い始めるのである。すなわち、工場施設、技術、機械そして組織構造は西欧的なものであるにもかかわらず、工場内の労務管理や社会関係（要するに人間的側面）において、西欧的なものがそっくりそのまま受容されることはなかったのである（あるいは、そもそもそこまで受容しようとはしなかった、と考えるべきかもしれぬ）。例えば、組織構造としては近代的であるにもかかわらず、職員一職工の職務差に武士（士族）一

職人（平民）的な属性的身分差が重なりあったり、一方では、近代的職長制度たる「職工組合」を制度化し、旧来の親方徒弟制に基づく親方請負制的労働慣行の伝統を排除しようとするかと思えば、他方では伝統的な意識たる「家の奉公人」意識（主従関係）を利用して、よく移動する職工を定着化させるといった具合に、伝統と近代とを巧みに融合（ある面では葛藤を含む）させて日本式の工場運営を行ない、曲がりなりにも大工場へと育っていった、という興味深い現象を示している。

このような芸当を行なったのは、当初造船所に集まった雇傭人、日本人職員（武士、士族）及び平民中心の職工のうち、日本人職員であった。報告者は、日本人職員が造船所の運営権を雇傭人から取戻す過程や職工定着への努力のなかで、どのように日本式の方法をとり始めるに至ったか、その一端について報告をした^(註)しかし、西欧の近代工業技術、組織構造といった物的側面での西欧化、その運用面での伝統を巧みに生かしたやり方の奇妙な統一の一端を明らかに出来たとはいえ、工業化の進展とともに、初期工業化段階でのそのような状況はどうなっていたのか、また工業化された現在は、あるいは未来はどうなるか、という質問——それは社会の収斂と個別性の問題にかかわる——については、はっきりとした展望を述べることは出来なかった。ただ、現在をみても、報告者のやったように過去をみても言えることは、工業化すれば変化は必ず起こるとしても、変化したものが各国の間で全く同じになるという必然性はないだろう、と示唆するだけにとどまった。

むろん、収斂か個別性かの問題は、比較の対象、タイムスパンの選択によって解答も複雑になる。工業化された国々のみ比較しても、似ているところもあり、そうでないところもある、といった甚だ歯切れの悪い答えしか出そうもないが、全人類的なマクロな立場に立つ哲学者(?)とかなり細々とした社会生活の比較に生活の糧を見い出す社会学者(?)との間では、比較のスケール等が違いすぎて議論がかみ合わぬのもいたし方ないと思える。しかし、哲学の沢田允茂先生等との議論の中で、比較のスケール、対象選択、変化をみる視点、未来展望についての再考を促されたと思う。ともあれ、単なる組織制度の研究ではなく、それを通しての文化変容や文化接触の問題が報告者の発表の意図であったこと、またこれは研究のほんの一端で、更に先へ進められていくということも理解されたとは思ふ。

註： 拙稿。「近代日本における工業化の一断面」（慶応義塾大学院社会学研究科紀要、第17号、1977）に基いた報告であるので、興味ある方は参照されたい。